2013.5.13　宇部日報

知っておきたい病気
宇部市医師会皮膚科医会

毛虫皮膚炎

かゆみ止めでは消えない皮疹

はじめに

日本では、チョウが2500種、ガが4500種おり、これらの幼虫が芋虫あるいは毛虫の形態をとります。毛虫の中には有毒毛を持つものがいくつかあり、それに触れることで皮膚炎が起こります。有毒毛には毒針毛（どくしんもう）と毒棘（どくきょく）があります。いずれも刺のごく一部の幼虫だけが有しております。

毒針毛について

毒針毛を持つものはドクガ類（チャドクガ、ドクガなど）が代表的で、その幼虫には1匹当たり数十万本から数百万本の毒液を含んだ毒針毛があり、長さ0・1㎜と小さく、肉眼では針というより粉に見えます。葉が揺れると毛虫は外敵から身を守るため、大量の毒針毛を振りまきます。これが皮膚に突き刺さり皮膚炎を起こします。その毒針毛は卵や繭の表面、幼虫が脱皮した殻にも付着しており、これらに触れても皮膚炎が起こります。

症状

かなり個人差がありますが、毛虫に触れる機会があって数時間以上経過してから発症することが多く、直径3㎜大くらいの赤いブツブツがたくさんできて、だんだん数が増えてきます。まず左右非対称に分布します。

通常非常に強いかゆみを伴います。中にはひどいかゆみのため眠れなくなることもあります。なお発熱はありません。

発症の機会について

当地域では8月から10月に多く見られます。次のような時に発症することが多いようです。

1、直接毛虫に触ったり、毛虫が皮膚に付いた場合。

2、木の下で遊んだり、食事をした時。

3、草むらの近くを散歩して、毒針毛が風で飛んできた場合。

4、河川の土手や畑などの草刈りの時。

5、草むらに入った場合（山菜採り、ボール拾い、釣り、ゴルフなど）

6、草むしり、庭木の手入れなどをした時。

7、洗濯物に飛んできた毒針毛が付着した場合。

以上、直接毛虫に触れなくても、毒針毛が落ちていると思われるところでも、発症の機会があるようです。また、毒針毛は衣服を容易に通過するため、気をつけて長袖などの衣服で覆っていたにもかかわらず、発症することも少なくありません。

治療

症状の程度にもよりますが、かゆみ止めを塗るだけでは皮疹はなかなか消えません。湿疹やかぶれの治療に準じて、外用にはステロイド剤を、程度によっては内服（抗ヒスタミン剤や抗アレルギー剤、重症例ではステロイド剤）を併用します。

毛虫の毛が付いたと思われたら、ガムテープを使ってはがし取ることや、泡立てたせっけんと流水による洗浄でかなり除去できるという意見もありますが、その効果には個人差があります。

また皮膚をこすると、付着した毒針毛が折れ、次々と刺さることで、皮膚炎がますます広範囲に広がってしまいますので、こすらないよう注意しましょう。

チャドクガの幼虫

予防

チャドクガが発生するのが6月と9月の年2回ありますので、この時期が危険です。街中の公園や人家の庭には、ツバキやサザンカなどチャドクガの幼虫の食樹となる植物がたくさん植えられており、これがチャドクガの生息に適した環境になっていますので、毛虫の発生を止めるのは困難です。したがって、葉の形が悪いあるいは黄色く変色している時、地面に細かいフンがたくさん落ちている時は危ないと思って近づかないのが無難です。どうしても作業しなければならない時は、かっぱに手袋、帽子、元にタオルを巻いて完全防備し、しっかり皮膚を保護しましょう。

先ほどお話しましたが、この毛虫は薬などで殺しても死骸の毛からでも、また冬に木の剪定せんぐいをしても毒針毛が残っていて、皮膚炎を起こすことがあるので、くれぐれもご注意ください。

（久本皮ふ科医院・久本和夫院長）